第九回ふくふく童話大賞「大賞」

大時計

町の真ん中の広場には、この町にはふつりあいな大きな時計がたっています。今から八十年前に、町の出身でごんたさんという方が寄付してくれたものです。ごんたさんは十五の時に町を出ていって、たいそうな金持ちになった方だそうです。時計が完成して広場にたった時、あちこちの市長さんや議員さんなど大勢のえらい人達が集まり、とても盛大に式典が行われたそうで、町の人口の何倍にもなったということです。

それで町では「ごんたさんの大時計」と親しみをこめて呼んでいましたが、今ではただの「大時計」で通っています。ごんたさんの事を知っている人がだんだんいなくなってきた事もあったからです。

どの家からも窓さえ開ければ大時計が見えるように作られていました。しだいに町の人々は時計というものを持たなくなり、一軒だけあった時計屋もなくなってしまいました。町で時計屋はもうからなくなったからです。

もし、大時計がこわれてしまったらですって？　大丈夫です。なにせ八十年間、一度もこわれたことも狂ったこともないのですから。

ごんたさんはものすごく大金持ちでしたので、世界中から腕のいい職人さんを集めてもらい、いくらお金がかかってもいいからと作ってもらったそうなのです。おかげで、世界に二つとない、精巧な大時計が出来あがったのです。

ですから、いつも正確に時間を知らせてくれ、町の人々の生活は

大時計なくしては考えられなくなりました。

朝の六時の時報には、これから始まる一日が楽しく快適であるような心地好い音楽がながれます。町の人々は清々しい朝を迎えるのです。

夜の十時になると、一日の疲れをいやし深い眠りにつけるように心休まる音楽が聞こえてくるのです。人々の一日がこうして終わります。

町の町長さんはアキラさんです。アキラさんは、昔よく大時計に石を投げては怒られたものです。しかし、子どもの力ではどう頑張っても大時計までは届きません。

アキラさんが大時計に石を投げるのには理由がありました。たった一軒あった時計屋というのがアキラさんの家で、アキラさんはよくお父さんが酔った時に「大時計さえ無かったら」と口ぐせのように嘆くのを

聞いていたからです。時計屋が赤字なので店を閉めようかどうか悩んでいた頃のことです。しばらくしてお父さんが亡くなって、とうとう時計屋は閉めてしまいました。

そのアキラさんが今では町長になり、大時計は町には無くてはならない物になりましたので、「大時計を守る会」の会長まで務めているのです。大時計は町の観光名物になり、遠くからでもたくさんの人が訪れて来ます。大時計の時報の音楽を聞いたり、その下に立つと病気が治ったり体にいいからと、口々に伝わっていったからです。

大時計を中心に色々なお店がたちならんで繁盛し、人々や町の生活を豊かにしてくれています。

町のはずれに春さんが一人で住んでいました。春さんはかれこれ

百歳くらいになるのでしょうか。役場の戸籍が焼けてしまったことがあり、正確な事がわからなくなりましたので、百歳くらいとしかいいようがないのです。

春さんは「ごんたさん」を知るこの町の数少ない内の一人です。この頃、春さんは目が少し不自由で、出かけるのがおっくうになっていました。それで仲間のみんな、吉さんや妙さん、オコさんたちが春さんの家に集まってきました。

「春さん、目の具合はどうだ？　ちょっと不便になったなあ」

「ああ、ありがとうよ。その代わり耳の方がさえてきた感じがしてね。何か、これまで聞こえなかったものが聞こえてくる気がするんだよ」

「えっ、春さんもか。私もだよ」
妙さんがあいづちをうちながら、
「どんな感じに？」と聞きかえしました。
「大時計の音が変なんだよ。前よりゆっくりになっている。それに時々、夜中に泣き声のような、かすかな音がする。みんなははどう？」
「やっぱり、そう思うか？　町の誰も、そんな事言わないし、こんなこと誰かに話したら変に思われるかと黙っていたんだけど」
吉さんやオコさんも口々にこんな事を言いだしました。
「それに最近流行っている病気と何か関係あるような気がして…」
春さんの言葉にみんなも、はっとしました。
約一カ　ほど前から、町のあちこちで　妙な病気がおこりだしてい

たのです。生まれたばかりの赤ん　が、こんこんと眠りつづけているのです。何という病気なのかもわからず　つ　もないまま、さらに病気は　に広がっていっているのです。子どもたちがどんどん病気にかかって眠りつづけています。

「みんなも　じように感じていたんだ。どうしたらいいと思う？　一度アキラさんの　へみんなでで　にいってみようか」

春さんが　しました。

何日かして　人でアキラさんを訪ねました。

「やあ、みなさん、おそろいで、今日はどうしたんですか？」

アキラさんがにこにこして迎えてくれました。

「アキラさん、大時計のことで何か　の人から言ってきてませんか？」

吉さんが話をきりだしました。
「いいえ、　に何もありませんよ」
「このところ、大時計が変だということに気がついていますか？」
「それは　耳ですが、どんなふうに変なんですか？」
「何というか…ちょっと　くなっているような気がするんです。それに、夜中に変な音が聞こえたりするものですから…」
「それは　りましたね」
「いえ、　に　ったわけではないんですが。ただ、気になったものですから…それと最近流行っている病気と何か関係でもあるんではないかと思いまして。アキラさんのお耳には　れておいた方がいいかとみんなで　しましてうかがったわけです」

「わかりました。みなさんのおっしゃることについては、一度　してみましょう。病気の事については関係　関にすでに　んでおりますので、もうすぐ　がわかると思いますよ。ご　心ください。ただ一つみなさんにお　いがあります。時計のことは今はあまり口　なさらないでほしいのです」

「どういう　ですか？」

「いえ、　なさらないで下さい。みなさんもご　知のようにもうすぐ大時計の　式典があります。今、こういう事が話　に　がると、町中が　してしまいます。ですから、せめて式典が終わるまでは、とお　い　しげたいのです」

アキラさんは　しそうでした。

もう の 会の方が アの では っています。 から へいろんな が持ちこまれてくるのです。 人は話したいことがまだあったのですが、そんなアキラさんをみるとこれ 言い出せず、 町長 をあとにしたのです。

人が ったあと、アキラさんは、さしあたって ぐ ではないと して、大時計のことは一 下にはさんでおきました。それにあと一 間 には大時計の 八十 年 式典がせまっています。町にとっては、大変 な行事です。なんとしても成 させなくてはならないのです。

しかし 式典が るにつれ するように病気は 大していきました。町中の子どもたちが眠りつづけた 、今度は大人達にも じ

があらわれだしたのです。
いよいよ式典が　日になりました。アキラさんは最　の　　を夜くまでやっています。
「あ　あ、それにしてもなんて眠たいんだろう」
アキラさんは大きく　　びをしました。どうにかして眠気をさまそうと　力するのですが、体がいうことをきかないのです。どこからか声が聞こえてきます。
「ね　む　れ。ねむれ」
アキラさんの体は　　に　してどんどんゆれてきます。
「この声はどこからしているんだ？　あっ、もしかしてこれが…」
アキラさんが気がついた時はもう　　れでした。

そしてついに式典の日になると、アキラさんをはじめ町中の人々が眠ったままになってしまいました。

不思議なことに、大時計もとかなくなってしまっていました。

長子　市